

修験道〈五體本有本来佛身〉説

——その教理としての〈胎内五位〉とその展開——

山下琢巳

はじめに

日本には古来、山岳を畏怖すべき森羅万象の地として信仰の対象とする宗教があった。この原始信仰は、外来の宗教の影響を受けて、自然と一体化し神々の存在を実感するために自ら険しい山々を抖擻する人々を生み出す。やがて形成されていく修験道では、山伏が、峰入りに際して死を意味する儀礼を行い、他界の地とされる山中で修行することによって霊的な生命力を取り戻していく。修験道の山岳修行には、象徴的な死とそれに続く苦行によって仏となり生まれ変わるという「擬死再生」の考え方が見られる。

大峰山中での修験行者が修得すべき秘伝を集録した、学峰雲外（一六九一）の『峰中秘伝』（元禄七年・一六九四・刊）の冒頭、総説にあたる部分は、次のようにして始まる。

夫佛道修行区別。頓證菩提法雖品多。即身成佛教獨自山伏密教起。胎内修行爲根本。阿字本不生理三世諸佛妙體一切衆生本性也。本有内證九識之心佛智能生萬法總體也。胎内者緣起阿心地十三大院三十七尊一切諸尊住内給。不變眞如姿。萬法種子也。出言語開口。乾坤普烈響是大日御音也。是住心佛如来也。

修験道において峰中で重んじられる修行法に、人を含む一切のものが、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天・声聞・縁覚・仏という十界を互いに具えているという真如を悟り即身成仏するという十界修行がある。そこでは、母胎に擬えた宿房を道場とし、床堅・懺悔・業秤・水断・闍伽・相撲・延年・小木・穀断・正灌頂という十種の修行が行われる。この十種修行について諸経諸論を引いての説明を載せる『峰中十種修行作法』は、「凡入峰修行者、十界一如観門。即身即佛極位也」とする。そして、この十界一如という真如観に至る修験道独自の修行法を、学峰は「胎内修行」という言葉で捉える。

修行者が、儀礼によって死者となった後、峰中でふたたび一個人の人として新たに自己を形成していく過程が、母胎内での成長に擬せられる。胎内は、一切諸法の根源で本来的に存在する阿字より起こり、そこには、胎蔵界と金剛界の一切の諸仏が住する。胎内とは、「不變眞如」（永遠不動の真理）を表すものであり、また、「萬法種子」（ありとあらゆる存在を生ずる力）を有する。胎内で育まれた修行者は、「我五體者本有本来佛身」（尊海『修験常用秘法集』「火生三昧耶之大事」）であることを身を以て悟る。

峰入りを胎内修行とする修験道では、修行者を胎児と見なし、これが段階を踏んで成長する。玄奘訳の『阿毘達磨俱舍論』第九卷では、胎児の変化が羯賴藍（かららん）・頰部曇（あぶどん）・閉尸（へいし）・健南（けんなん）・鉢羅奢佉（はらしゃきゃ）という五つの分位として胎生学的に捉えられている。修験道の教義書では、修行者が擬死の後、胎児として新たな生命を受

胎し、やがて成長して出産に至る過程に、この〈胎内五位〉が、秘説として用いられる。

一、十界修行と〈胎内五位〉

『修驗秘奥鈔』上下二巻は、明治二十三年（一八九〇）仲春（二月）、青森県深浦の旧当山派修験で円覚寺住職海浦義観による刊行。^{（注）}明治五年九月十五日に太政官府より、修験道廃止令が出される。この布達によって、数百年の長きに渉って培われてきた修験道の宝物、什器とともに教義書・儀軌も散逸の道を辿る。こうした状況の中で、義観は、修験道典籍の収集・筆写に勤めた。その回顧に拠ると、^{（注）}明治十二年、旧当山派の本山醍醐寺の経蔵に入り、狂人との蔑みを受けながら、二年の間、数千巻の聖教中から修験道に関する書を選出して謄写。糊口が尽きて帰国後の明治十四年、謄写した修験道恵印法流次第および峰中法流次第五十余巻六十冊を醍醐寺三寶院に納める。その後、明治二十四年、東洋哲学研究資料として、修験道叢書五十巻五十冊を、個人として東京帝国大学図書館に寄贈する。義観は、津軽の離村にあって、修験道教学の研鑽に努め、明治二十三年に、雑誌『伝統』五号に「修験道大意」を連載、三十一年に『修験安心儀鈔』、三十四年に『神変大菩薩宴録』、『修験道法具要解』を刊行する。

数多の修験道書に接した義観は、その自序で、「夫修驗秘奥鈔者。法身毘盧三昧耶。凡即是佛之秘奥也」として、『修驗秘奥鈔』を特に重んじる。そして、この自序では、十界一如を悟る方法は、修行そのものにあるのであって、筆紙によって伝授されるものではなく、師からの面授口伝がその契機となること。但し、建長年中に、旭連が先師の口説を後々まで伝えるために『灌頂本軌』を編した。この書は、筐底に秘蔵され、伝授の書として江戸時代になっても公刊を許されなかった。今、明治の世に及び、修験道が邪法視されるのに忍びず、筆授された一本の章段字句の乱れを訂正して、『修驗秘奥鈔』と名を改めたと刊行に至った経緯を記す。

『修驗秘奥鈔』の内部は、『峰中灌頂本軌』、原序には「維時扶桑建長六甲寅二月之日於内山金剛密乘成乘蘭若僧正旭連記師主口説」とある。これ

に拠れば、原題は、『峰中灌頂本軌』、建長六年（一二五四）、大和国山辺郡内山永久寺の僧正旭連が、編纂したことになる。永久寺は、室町時代に三十六人の当山派大先達が在った寺で、石上神宮の神宮寺として隆盛を極めた。『峰中灌頂本軌』には、修験道灌頂の理論と実践についての三十三の切紙を収める。修験道の灌頂が成立するのは、応永頃（一三九四―一四二八）、儀礼として完成されるのはさらに時代を下る。よって建長六年は権威付けのための仮託であり、室町時代に内山に伝授されていた切紙をまとめたものとされる。^{（注）}

『峰中灌頂本軌』上巻には、峰入りから修法者自身が即身成仏、十界相互の境地に入ったことを感得するために最も重視される正灌頂までの峰中修行に関する秘伝が記される。下巻は、上巻の内容のうち特に補説として詳細に取り上げるべき秘説が載る。このうち下巻二十五「床堅第二重印信口決」に次の様な説が載る。

二重内五貼印者
先内縛形最初羯頼藍位也。又赤白二水凝滑形也。
二中指立合類部曇位獨貼形也。
二頭指開立閉戸位三貼形也。
二大指普立健南位四大和合形也。
二小指竝立鉢羅奢佉位五貼形也。
經此五位即成二字所成塔婆。塔婆者五輪也。五輪者衆生三形諸佛總體也。

床堅（ここがため）とは、十界修行の第一に充当され、峰入りの初宿の夜に新客に自身即仏または自身即大日を觀じさせる作法。永祿元年（一二五八）に豊州彦山靈山寺の大先達阿吸房即伝が、出雲国真光院寛龍に授与した『彦山峰中灌頂密蔵』は、切紙十八通のうち十二通を『峰中灌頂本軌』から抜き書きする。^{（注）}この書では、胎内手一合正灌頂、生起柱源闍伽、死滅乳木護摩とともにこの胎外床堅を即身成仏のための秘儀とし、これら峰中での四度灌頂を「修驗成道正覺之要路也」とする。

『峰中灌頂本軌』所載の印信口決では、この床堅の秘儀において、四重の印のうち二重の印にあたる「内五貼印」という五つの形を示す印契が、〈胎内五位〉に対応されている。まず、指先を内側に隠し両手を組み合わせる内縛印は、羯頼藍の位で、父母の赤白の淫水がひとつとなって凝固した形。次にこの形から二本の中指を立てて合わせた印契が、頰部曇の位と独站を表す。そして、この形から二本の人差し指を開いて立てた印契が、閑戸の位で三站さらに二本の親指を密着させて立てた印契が、健南の位で地・水・火・風の四つが和合した形。最後に二本の小指を並立させた印契が、鉢羅奢佉の位で五站の形を表す。独站は一真如、三站是三密三身、五站は五智五仏を表すとされる。人は〈胎内五位〉を経て、阿字より成る塔婆となる。塔婆とは五輪のことであり、地・水・火・風・空の五大、頂・面・胸・臍・膝の五所、また、大日・阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就の五仏を表す。五站印は、仏の五種の智慧である法界体性智（真理の世界の本性を明確にする智）・大円鏡智（鏡のように万象を顕現する智）・平等性智（もろもろの事象が平等であるということを観ずる智）・妙觀察智（もろもろの事象の差別相を正當に觀察する智）・成所作智（自己および他人のためになすべきことを成就させる智）をも表す。

彦山流の書『峰中十種修行作法』は、「第一床堅者。即身即佛形儀。十界一如極意也」とする。十界修行の初夜、人が生まれながらにして仏性を持つことが、五つの印契を結ぶことによって示される。この五つの印契は、人が胎内で成長する五つの過程である〈胎内五位〉に対応する。そして、この秘儀は、同時に、修行者が、峰中で生まれ変わっていくこれからの修行をも示す重要な儀式であった。

二、内証山伏と〈胎内五位〉

胎内修行の期間、父母の赤白二滯の和合によって母胎（山岳）にやどり、〈胎内五位〉に充当される修行によって悟りを開き出産（出峰）するまでの修行者を、内証山伏または山臥と呼ぶ。

『彦山修驗道秘決灌頂卷』は、彦山の宰相律師有快相伝の大先達印信二十七通を収める。すべての切紙には、「文明十四年壬寅（一四八二）八月吉日」に宥快の堵重への授与に始まり、讚栄―真海―慶淳―実源との相承が示され、最後に「寛永三丙寅（一六二六）三月吉日 大先達権僧都座主有清授與／傳師大先達権僧都覺林房実源示之」と記す。また、奥書には「右一冊者本寺聖護院御門跡御内從岩坊法印村信書寫之／皆寛文四甲辰（一六六四）天應鐘中漸／武州江戸大先達參仕修學者／大覺院秀長法印」とある。この切紙のうちの「第四内証山伏事」では、悲母の胎内で〈胎内五位〉を経ることを内証山伏とし、また、赤白二滯和合を万法出生の源である八葉の蓮華とする。そして、大日如来を中心にして八葉に四仏四菩薩が配され、衆生本有の心の象徴とされる八葉蓮華は、須彌山・菩提山・血山の三山となり、この三山で成長していくので、内証山伏はまた山臥とも呼ばれる。

夫内証山伏者。我等衆生、父母赤白二滯和合宿悲母胎内經五位形也。胎金兩部法界天地成。此和合形萬法出生源也。則八葉蓮華也。蓮華反成三山。名須彌山一名菩提山一名血山。是則佛連金三部也。然此山下受赤白二滯經十月生故山臥云。

内証とは、自己の心のうちで真理を悟ること。内証山伏は、胎内修行に於いて、どのような段階を経て悟りを開いていくのか。『彦山修驗道秘決灌頂卷』では、〈胎内五位〉の一位を、三毒、つまり煩惱の根本となる貪欲・瞋恚・愚癡の始まりと捉える。ただし、三位に至り、三密菩提、その行いは仏のはたらきと同一のものとなり、四位では五智が所成され、五位には仏果圓滿、修行の結果として仏位に至ると説く。

其五位者。

一父母意赤白乳字和合佛性種子下母胸中。八分肉團上成法身大日。是位羯刺藍性云也。貧瞋癡始也。是交會形也。父姪白表法性形。母姪赤表無明形。是則因果常住佛種也。

二頰部曇二七日位。

三閉戸三七日位。是三密菩提三身形也。

四鍵南四七位。此位法然日覺五智所成位。

五鉢羅奢佉。此位佛果圓滿位。如是行義畢。於胎内五智圓滿。而至十月出生。

『彦山修驗道秘決灌頂卷』では、内証山伏に相對する概念として外用山伏という語を用いる。同書では、外用山伏を「胎内五位」の修行を終え、下化衆生のために出峰した山伏とし、「内調伏衆生惡心」。外降伏四魔怨敵。故山伏云」として、内証山伏を山臥と記すのに対し山伏と表記する。山臥、山伏の二字の表記の相違については、室町時代末頃の成立で、修驗五書のうちの『修驗三十三通記』（彦山靈仙寺蓮覺・智光撰かとされる）、および『修驗道修要秘決集』（彦山靈仙寺阿吸房即伝撰）所収の切紙「臥伏二字之事」で説かれて以来、数多くの教義書で取り上げられている。

『山伏二字義』は、「正保二乙酉年（一六四五）六月 日」との年記を持つ跋文に拠れば、日向国正因山見性寺の有錢が、役小角伝来の秘記数百余章の中から、山伏の二字義に関するものを採りだし、これに注解を加えたという。しかし、秘説とされる原文は、『修驗三十三通記』所載切紙の本文に近いとされる。このうちの原文「且分別臥伏之義 凡有兩義。一曰。山臥者母胎八分肉團也」の注には、山臥の「山」の字が、煩惱を指す無明山・重山・血山を意味すること、また、血山とは胎内八分肉団でもあり、自性清淨因果不二を表す八葉蓮華であるとしたうえで、「胎内五位」に替えて『大報父母恩重經』を引用する。

大報父母恩重經曰。佛告阿難。汝今諦聽諦聽。吾今爲汝分別解說。

阿嬢懷子十月之内極是辛苦。

阿嬢一箇月懷胎恰如草頭上珠保朝不保暮早晨聚將來午時消散去。

阿嬢兩箇月懷胎恰如撲落凝蘇。

阿嬢三箇月懷胎恰如凝血。

阿嬢四箇月懷胎稍作人形。

阿嬢五箇月懷胎在嬢腹中生五胞。何者名爲五胞。頭爲一胞。兩

肘爲三胞。兩膝爲五胞。

阿嬢六箇月懷胎孩兒在嬢腹中六精開。何者名爲六精。眼爲一精。

耳爲二精。鼻爲三精。口是四精。舌是五精。意是爲六精。

阿嬢七箇月懷胎孩兒在嬢腹中生三百六十骨節八萬四千毛孔。

阿嬢八箇月懷胎生其意智長九竅。

阿嬢九箇月懷胎孩兒在嬢腹中喫食不食桃李蒜菓。五穀飲味。阿嬢生藏。向下熟藏。向上有二座山。此山有三般名字。一名須彌山。

二號業山。三號血山。此上一度崩來化爲一條凝血流入孩兒口中。

阿嬢十箇月懷胎方乃降生。

『大報父母恩重經』は、中国で撰述された偽經『父母恩重經』の増広本で、唐代中期に成る。室町中期成立の『三國伝記』卷八ノ七「父母恩徳深重事」は、この經典を典拠とする。本国より朝鮮、日本で流布したとされる『大報父母恩重經』は、江戸時代に入ると、「寛永二十年十一月九日／真別處／良永」の刊記を持つ高野山良永律師開板本などを始めとして、その注釈書とともに数多くの版本が刊行される。この經典では、胎児成長の様子が、十ヶ月間の月毎について説明されるが、その九ヶ月目、阿嬢（おかあさん）の生藏の下、熟藏の上にある須彌山（あるいは業山また血山）という山がいちどきに崩れて一条の凝血となって胎児の口中に流れ込むとする。有錢は、この記述、特に八葉蓮華とされる血山をここに見いだして、注として『大報父母恩重經』を引用したものであろう。

先にあげた内証山伏と外用山伏を論じる『彦山修驗道秘決灌頂卷』には、「外用山伏者。即經胎内五位三十八點位後。出胎是下化衆生願也」とある。

ここにいる「三十八點位」とは、「十月懷胎三十八転」の説と呼ばれ、胎児が七日ごとに三十八回変化するというもの。合計二百六十六日、大小の月を考慮すると九ヶ月と四日で人は出産すると説く。その七日毎の胎児の様子は、『仏為阿難説処胎會』、および異訳「仏説胞胎經」に詳説される。そして、この説の概要は、『阿難問經』に出るとして、偽經『孟蘭盆經』のもっともはやい注釈書『孟蘭盆經疏』に新注を施した宋の元照（慶暦八／政和八年・一〇四八／一一一六）の『孟蘭盆經疏新記』に載る。『孟蘭盆經』は、『父母恩

重經」とともに父母の広大な恩に対する子の報恩の義務として盂蘭盆会を行うことを説く經典として、我が国では、平安時代以来盛行する。

『大報父母恩重經』は、当山派修験の教理を闡明するために醍醐三寶院より昭和二年に刊行された『修験聖典』の諸經要集の部にも収まる。修験者の間で、『盂蘭盆經』『大報父母恩重經』といった經典やその注釈書が、ある時期から意識され始めたのは確かなことであろう。しかし、宥鑊が自己の教義書に秘説として峰中修行の段階を擬えた〈胎内五位〉に替えて、十月胎児の成長を記す『大報父母恩重經』の説を載せた背景には、近世宗教界を覆ってきた新たな流れが深く投影しているのではないか。

三、衣体と〈胎内五位〉

室町時代末期から江戸時代初期にかけての文化的事象のひとつに、それまで師弟伝承の秘説とされてきたものが、纏められて一部が公になるということがある。修験道において、伝授されてきた印信・口決の類を整理分類した人物が、下野日光山の出身で、豊前国彦山に赴き大先達金剛位を得た阿吸房即伝である。そして、即伝の編集した切紙類は、江戸時代に入ると出版されて、修験道界に多大な影響を及ぼしていく。

「崑元禄四龍次辛未年（一六九二）林鐘日」に不慧によって書かれた「修験道切紙発題」に拠れば、『修験修要秘決集』は、彦山の智光・蓮覚が筆録した先進の口伝心授を、応永の頃（一五二二～一五二八）、即伝が増補分類して五十通とした切紙を翌元禄五年刊行したものという。この五十通の切紙のうち二十八通は『修験三十三通記』所載の切紙と類似し、共に彦山に伝わった秘伝を載せる。

『修験修要秘決集』巻之上は、修験者が峰入に着用する衣体や携える法具についての大事口決を記した「衣体分十二通」より始まる。このうち「第二斑蓋之事」では、峰入の修行者が雨露よけに被る斑蓋（はんがい）が、仏頂莊嚴の天蓋であり、衆生が胎内にいる時の胞衣を示し、胎児が五位圓滿して出生するためのものとする。^{（注15）}

夫修験所具斑蓋者。佛頂莊嚴天蓋。慈悲覆護形相也。凡天蓋者一切衆生住悲母胎内一時戴胞衣義也。胞衣者於胎内始從羯賴藍位終至鉢羅奢佉位。蓋赤子頂上。防悲母所飲食胎内寒熱毒氣。不令其肉身敗壞。故五位圓滿而速出胎。

その巻末「修験附法印證狀」に、「豊州彦山靈山寺南谷華藏院住客／權小僧都阿吸房法印則傳示之」と明記される『修験頓覺速證集』は、修験道に関連した仏教教義が四十二項に渡って記され、修験道教義書の参考文献的性格を持つ。上巻「第二十五峰中碑傳事」に永正十年（一五一三）の記事があり、下巻「第九仏法流布之事」に永正十四丁丑の年次が記されることより、即伝が彦山流の印信を受けて間もない頃に書かれたものとされる。版本に元禄六年（一六九三）刊本があり、修験五書の一つとして重んじられた。この『修験頓覺速證集』巻上「第六胎内五位之事」には、『修験修要秘決集』では詳細に記されなかった〈胎内五位〉について解説する。

一最初羯賴藍者梵語也。此翻和合。是父母和合所起愛故。二水圓滿受法界元氣則生位也。女子父起愛。故母胎内右脇向内宿也。男子母起愛。故母胎内左脇向外宿也。

二類部曇者梵語也。此翻胞。是父母二姪少凝既欲成肉位也。

三閉戸者梵語也。云血肉。是已血肉成位也。

四健南者梵語也。此翻凝骨。是已堅骨肉成位也。

五鉢羅奢佉者梵語也。此翻支節。是已手足爪髮生。五體出生人形成位也。

是謂胎内五位也矣。

『彦山修験秘訣印信口決集』は、即伝相承の修験道印信切紙二十一通を集める。その一十四通は、島田蕃根旧蔵本（現京都大学附属図書館寄託）で、近世期の写本、十五～二十一通は、『修験道章疏』編者の中野達慧が追加したもの。切紙のうちには、承運―即伝―定珍の相承を示す奥書を持つものがあり、即伝は永正年間承運より、定珍は、天文十三年（一五四四）、天文十

九年、永祿元年（一五五八）に即伝よりそれぞれ授与されている。『彦山修驗秘訣印信口決集』所載の切紙「十八胎内五位事」には、『修驗頓覺速證集』とは、やや異なった説を載せる。

第一羯藍者梵語也。此翻「凝滑」。赤白二諦和合一圓満位也。印形也。

第二額部曇者此翻「皮結」。是赤白二水少凝欲成^レ肉。獨胎形也。

第三閉尸云者此翻「血肉」。是已成^二血肉^一位也。三胎形也。

第四健南者此翻「堅骨」。是已成^二骨肉^一位也。五胎形也。

第五鉢羅奢佉者此翻「支節」。是已手足爪髮生五體具足^{スル}位也。率都婆形人形也。

即伝を中心に相承された〈胎内五位〉の秘説について見ると、『修驗頓覺速證集』所載のものは、羯藍藍―和合、額部曇―飽、閉尸―血肉、健南―凝骨、鉢羅奢佉―支節とその訳語を載せる。玄奘の『俱舍論』には、〈胎内五位〉の音訳のみで翻訳を記さないが、普光が玄奘直伝の正訳をもって著したとする『阿毘達磨俱舍論記』には、訳語が載り、『修驗頓覺速證集』所載の〈胎内五位〉は、その本文に類似する。^{（注19）}また、『彦山修驗秘訣印信口決集』のそれは、五位の訳語のあることは同じながら、さらに胎児の形を独鈷・三鈷・五鈷などにあてる点が、先にあげた『峰中灌頂本軌』に載せる床堅の儀式での〈胎内五位〉に対応する五つの印契を想起させる。即伝が、『峰中灌頂本軌』の切紙を基にして『彦山峰中灌頂密藏』を撰したことは、先述したが、室町末期になると、〈胎内五位〉の秘説を記す切紙も、種々のものが、大先達とされる人物のもとで整理されていく。そして、この現象は、江戸時代に入ると切紙への注釈という形をとって、さらに広がりを増していく。

四、近世切紙注釈と〈胎内五位〉

『修驗心鑑鈔』上下二巻は、当山派で特に重視された教義書の一つで、『修驗道章疏』当山派関係の教義類、また醍醐三宝院編『修驗聖典』六「教義」において筆頭に収まる。^{（注20）}その序文には、「于時寛文壬子歳（一六七二）

孟秋月／奥州会津若松於「不求軒」常圓謹序」とあり、巻上前文には、「常圓註」として「此書者則役行者言。而聖實加^レ釋。名謂「修驗心鑑之書」。以所授之後、修驗一也」と記す。これに拠れば、『修驗心鑑鈔』は、醍醐寺を創建し当山派修驗の祖と仰がれた聖宝が、役行者の言に釈を加えた『修驗心鑑之書』に、奥州会津若松の修驗者常円がさらに註を加えたものということになる。しかし、『修驗心鑑之書』なる書は、常円自身が、複数の切紙の教義を連続させ、多少の自説を付加して一章の形に整えたものともいわれる。

『修驗心鑑鈔』下巻は、入峰で使用される法具の功德方便が記されるが、原文すなわち『修驗心鑑之書』の「入峰^ノ笈者胎藏界華藏世界形箱者金剛界。兩部和合之五位也。是建立如來、天真佛。謂^二之本覺眞如^一。明^二入之義^一也」に次のような註を付ける。

笈四方母四大。内虚即眞空之義。納^ル物約^二寶藏^一。形箱金剛界。兩部和合生^二色身^一。華藏世界母胎内。

五位者。梵語。

一最初伽羅卵。華云凝滑。金胎和合之一露水初謂^二母胎^一。

二額部曇。云凝肉。從^レ託母胎生^二諸形相^一。

三閉尸。云血肉。於胎中成^二六根^一。

四健南。云堅固。五體具足圓満。

五鉢羅奈位。云支節。本三摩耶形而唱^二阿吽^一。

謂^二之胎内之五位^一。

今從胎中果現。從因未來果生。是從果向^レ因。從因至^レ果。依^レ之該三世因果。車輪之轉轉而如^レ無有^二休息^一。能證入則因果共無而當體即空寂然不動。然則果涅槃之樂果。因道品之樂因。斯即明^二入之義^一者也。

笈（おい）は、修驗者が峰入の際に必要な道具を入れて背負う箱。形箱（かたはこ）は、笈の上のにせる木製の箱で笈と一具をなす。ともに山伏十六道具の一つで、『修驗三十三通記』の「衣体分十二通」には、「夫修驗所具笈者。胎藏^ヲ字^ニ理體。萬法一統之内證也」（第九笈秘決）「夫形宮者。金界^ヲ字^ニ形。修驗法門秘咽也」（第八肩箱秘決）とあって『修驗修要秘決集』

本文もほぼ同義)、笈は胎蔵界、形箱は金剛界を象徴すると説く。また、同書では、「入峰修行輩負笈事我等住母胎姿也」として、入峰の行者が笈を背負うのは母胎に住することを示すと解釈する。『修驗心鑑鈔』の註では、笈と形箱は一具として金胎両部が和合したものであり、この華藏世界は母胎であって、色身が〈胎内五位〉を経て形成されていくとする。〈胎内五位〉の部分では、訳語とともに胎児形成の様子を載せる。

修驗道教義の大半は衣体や法具の意義付けにあるとされる。『修驗法具秘決精註』上下二巻は、「修驗道章疏」所収本には「不求軒常圓註／海浦義観補註校正」とあるが、奥書・序跋の類はない。^(注22)ただし、『日本大藏經解題』には、「修驗の秘決法具等に就て常圓が延寶二年（一六七四）註釋したものである。海浦師更に之に補註を加えて完全ならしめ居る」とある。その上巻は、衣体分十二通および修驗肝要の二十五項の秘決に対し、註・再註・補注を施すという体裁を取る。秘決とされる本文は、『修驗修要秘決集』または『修驗三十三通記』と類似した文に「私曰」とする文が付加されている。そして、その下巻では、特に、頭襟・斑蓋・鈴繫・結袈裟・法螺・最多角念珠・錫杖・緑笈・肩箱・金剛杖・引敷・脚絆という衣体分十二通についての註のみを載せるという体裁を取る。

本書上巻の「斑蓋秘決」の「私曰」とする部分には、次のような本文が載る。

胎内五位者。

一最初^ハ凝滑者梵語也。此曰凝滑。亦翻^レ和合。赤白二水和合位也。

二頰部曇者梵語。此曰^二胞瘡^一。是父母一水少凝成^レ肉位也。

三閉尸者梵語也。此曰^二血肉^一。既成^二血肉^一位也。

四健南者梵語。此云堅固^一。是既成^二堅固^一身位也。

五鉢羅奢佉者梵語。此曰^二支節^一。是手足爪髮生^二五體具足^一位也。云云

この〈胎内五位〉の記述は、梵語の訳語を載せて解釈するなど先述した阿吸房即伝の『修驗頓覺速證集』巻上「第六胎内五位之事」所載のそれに類似する箇所がある。おそらく、書写のある段階で、即伝相承のものと同系統な

から異文を持つ〈胎内五位〉切紙が、『修驗修要秘決集』『修驗三十三通記』とは流伝を異にする切紙集の一本に追記されたのであろう。そして、常円は、この秘決の〈胎内五位〉に次のような註を付ける。

○凝滑者初七日也。無明如^二露^一。是即白骨父恩。赤肉母恩。赤色^二孔字^一我等皮肉。白色^二孔字^一成^二我等骨髓^一發心^二孔字^一也。

○胞瘡者二七日也。是即五體姿也。如^二疣頭^一也。修行^二孔字^一也。

○血肉者三七日也。是即已五體相。雖^レ頭末^レ有^二男女差別^一位也。菩提^二孔字^一也。

○堅固者四七日也。此位^二男女名字決定^一云堅固也。然手足未調也。

四七二十八日男女名字定。以此實儀^二世俗猶如^一祝二十八日也。可^レ秘。是涅槃^二孔字^一也。

○枝即者五七日也。此位^二圓滿手足^一。究竟^二終^一字也。此位^二結本三摩耶印^一。結跏趺坐^二唱^一孔字^一也。

この註には、これまで見てきた〈胎内五位〉説にはない要素が含まれる。つまり、胎児生成の状態を「発心・修行・菩提・涅槃・方便」の五つに分け、これに梵字の阿字を配する。『俱舍論』第九巻の〈胎内五位〉説を本説とし、胎児の変化を羯賴藍位・頰部曇位・閉尸位・健南位・鉢羅奢佉位の五段階に分け、これに円形・三日月形・三胡形・五輪塔・結跏趺坐する人形の図をあて、さらにそれぞれに五智・五仏・五方・五転を配して説明を加えるものに〈胎内五位図〉がある。この〈胎内五位図〉は、正元二年（一二六〇）二月二日、三宝院流の重精が福土寺月輪房本を書写したとの奥書を持つ『阿字観』に早く見え、種々の諸本が伝わる。本稿冒頭で取り上げた『峰中秘伝』（元禄七年刊）には、〈胎内五位図〉の本文部分が、若干の異文を持ちながら次のように引用される。おそらく、修驗道教義の世界にも、〈本有思想〉と〈阿字本不生説〉という醍醐教学を図示する〈胎内五位図〉が、ある時期に流入したためと考えられる。そして、『修驗法具秘決精註』の常円註も、この事実を反映してのことであろう。^(注23)

父ノ情初七日是^レ赤^ハ二^ト云貧煩惱ヲ受。初父母ノ交會赤白二滯和合ノ體ト成也。赤色^ハ孔^ハ字ハ母ノ情。衆生ノ肉ト成也。白色阿字ハ父ノ情。衆生ノ骨ト成。二ノ孔^ハ字胎金兩部ノ大日因果常住沸性ノ種子也。故ニ衆生ノ心城兩部ノ大日五百餘尊鎮ニ芥子内ニ住シ玉フヲ云フ也。故ニ此ノ孔^ハ字本不生ノ理ヲ覺ルヲ即身成佛東方大圓鏡智。又ハ發心門阿闍佛ト云也。生死ノ時此峰ヲ大天上ト云。胎藏界ノ肉皮母ノ情也。南方寶生佛ノ平等性智修行門是ヲ阿浮曇ト云。

二七日三時此ノ形ト成ル。是ヲ二舌ト云。左右ノ高キハ兩部大日ノ種子ト成ル。赤白二色^ハ孔^ハ字左右ノ形ト成ル。孔^ハ字小天上涅槃彼岸ト爲ル。金剛界父ノ情骨。西方無量壽如來ノ妙觀察智菩提門也。

阿ハ三七日ニ此ノ形ト成ル。是ヲ三貼ト云。骨漸ク堅マツテ左右ノ眉ヲ顯シ。三貼ノ顯ルル是ヲ三密ト云ヒ。三菩提ト云ヒ。三身ト云ヒ。三渡ト云也。

西方 阿彌陀 火輪^一
北方 釋迦佛 風輪^ハ
中方 大日如來 空輪^ハ
南方 寶性尊 水輪^ハ
東方 阿闍佛 地輪^ハ

北方釋迦如來成所作智涅槃爲萬行ニ船筏ト成ル也。爰ヲ船渡ト云也。五輪三摩耶形ハ佛果圓滿ノ形也。如^レ斯母胎内五圓滿ノ佛體是レ也。上求菩提ノ觀念無^レ疑今ノ所作ニ住スル位也。然リト雖トモ下化衆生ノ爲ニ母ノ胎内ヲ出ル利生ノ用海也。

二有之七十日此ノ形ハ性德如來化度利生ノ爲ニ人體ヲ得ルト雖涅槃ニ歸ルベシ。靜ニ人體生身ヲ覺ル。大日如來心性^ハ孔^ハ字變シテ即チ大日如來ト成リ。彼ノ尊變化シテ大聖不動尊ト成也。

『修驗法具秘決精註』下卷「斑蓋註」では、〈胎内五位〉に関して相承された切紙がさらに集録される。その一つは、『彦山修驗秘訣印信口決集』の即伝相承切紙に類似し、もう一つは、『峰中灌頂本軌』下卷二十五「床堅第二重印信口決」所載のものに同じ。そして、「秘口曰」「古德曰」などとして、

さらなる解釈が付される。

胎内五位事。

五位者。

第一羯頼藍者梵語。此翻凝滑。是赤白二滯和合而一圓滿位也。

第二額部曇者此翻炮結。是二水少凝爲成^レ肉位也。

第三閤尸者此翻血肉。是已成^レ血肉一位也。

第四健南者此翻堅骨。是已成^レ骨肉一位也。

第五鉢羅奢佉者此翻支節。是手足爪髮生具足五體一位也。

當家付^二外五古印^一五位習也。

先外縛形最初羯頼藍之位。二水凝滑形也。

二中指立合額部曇位。獨古形也。

二頭指開立閤尸位。三古形也。

二大指竝堅健南位。四大和合形也。

二小指并堅鉢羅奢佉位。五古形也。經此五位則成^二人形^一。云云

父母成^レ子母爲^二外戚^一是血肉等也。父爲^二內戚^一是骨髓等也。母皮肉等在^レ外莊嚴身體故相好多屬^二女人^一也。

祕口曰。以^二父母^一無明法性習^レ之也。父白骨也法性也。母赤肉也無明也。

無明雖^レ滅法性無^レ盡也。

古德曰。斷^二肉身^一見^二眞佛^一。

妙藥大師曰。死後成^二白骨^一見^二法性^一。云云

聖護院に『修要鈔』と題する一巻の写本が伝わる。その序文には、天文十九年（一五五〇）に、宗旨の精要を示す三十三通を収めた「三巻抄註」に、心養が、添削・明訓を加えた由が記される。また、京都大学附属図書館島田文庫にも、『修要鈔』三冊の端本が伝わる。この書には、奥書があり、永久寺の円仙房宗深が、「六巻抄」なる書を、天正九年（一五八一）から天正十二年にかけて書写したとする。そして、さらに、宗深書写本を慶長十六年（一六一一）、同十七年に教円、元和二年（一六一六）に教円・静応が書写したものが現存本。この二人は、ともに上醍醐東谷の住侶。現存の二本より原

『修要鈔』は、三卷六冊で、即伝編纂の『修驗修要秘決集』の註釈書であつたとされる。また、聖護院、島田文庫には、『修驗記』という書が伝存する。この書の端本かとされる聖護院蔵の一本には、吉野の金剛山寺西藏院の不莫が、阿吸房即伝直書の切紙を秘奥として伝授する由が記される。しかして、この『修驗記』も『修驗修要秘決集』の註釈書で、『修要鈔』と内容の本文を持つ。

『修驗法具秘決精註』下巻の本文は、実は、『修要鈔』や『修驗記』の「衣体分十二通聞書」と同本文を持つ。「修驗道章疏」本では、下巻部分も常円が註を施したとするが、それは、既に聞書として纏められていたものをそのまま用いたに過ぎない。しかし、〈胎内五位〉に限り見ても、様々な紙や口伝、聞書の類が存在し、それは、室町時代末頃に整理されて、江戸時代には、もはや秘伝としての性格を失つて公になつていく。

五、〈胎内五位〉から胎児九ヶ月生成説へ

「胎内修行」を根本修行とする修驗道では、修行の階梯を表す〈胎内五位〉説を師弟相伝の秘説として特に重んじてきた。そのためか、これに変わる胎児生成説を、江戸以前の教義書に見出すことができない。ところが、本稿冒頭で触れた「元禄七年甲戌（一六九四）七月吉辰洛陽四條坊門／書林水田甚左衛門 版行」との刊記を持つ『峰中秘伝』の「笈渡之事」には、「一切萬物ヲ納ル筈ト者母ノ胎内鐵塔閑ル如ク也」として、胎児生成の様子を九ヶ月毎に説明する。

一月メニハ（左ノ目ノ形少シ出ル）。梵天王垂迹不動尊。（子守勝手ヲ行也。日天子十一面觀世音）。

混沌未分父母ノ姪和合シテ向ニ大圓境智也。鏡界初ル次第。

二月メニハ（右ノ目少出）。帝釈天垂迹愛染明王。

父母姪情和合シテ人間ノ體ト成リ顯ルレトモ未タ法事ヲ聞ス。悟ル心ナケレハ邪正不二ニシテ境界ニ住シテ善惡ノ分別モナシ。無名ノ所ナリ。

三月メニハ（左ノ鼻ノ穴）。炎魔法王垂迹軍荼利夜叉。

男女ノ姿止ク母ノ懷中ニ有テ住ナカラ聞法開悟ノ出来。是ノ悟ヲ分別シテ有ルニ依テ。善惡心タタカフ心ナリ。

四月メニハ（右ノ鼻ノ穴）。四大天王垂迹大威德無量。（金カケ西除一體行也。壽佛決定五如来）。

母ノ胎内ニ有テ。六根相應シテ皮肉調テ。母ノ乳味ヲ吞ム事ヲ怖シト思テ。兩手ヲ未敷蓮華ノ印ニシテ胸ノ下ニ付テ。身ヲ少クシテ。座臥ノ定ニ依テ。一切ノ物ヲ分別スル位ナリ。

五月メニハ（口ノ穴）。十二神垂迹不動明王。（泥川ノ行事。胎藏界大日如来）。

胎内ニ有ナカラ大千世界ヲ見聞覺悟ノ音聲本有ノ悟テ氣ヲ含ミ。過現未ヲ知テ是レ九品ノ蓮臺ヨリ出ル人形ナリ。

六月メニハ（左耳ノ穴）。八大金剛童子垂迹聖天。（節之行事。辨財天吒枳尼天大黑天）。

中臺八葉ノ人體ヲ具足シ。手足動キ自在也。胎内ニテ行歩飛行ナリ。七月メニハ（右耳ノ穴）。大歲神垂迹大荒神。（阿古瀧之事。愛染明王金剛大日）。

胎内ニテ手足自在ニ動キ。六根九穴皆皆以テ自在ノ心有ルニ依テ。同時ニ皮肉筋血道ニ至ルマテ出生スル故ナリ。

八月メニハ（尻ノ穴）。二十八部衆千手馬頭。（神通寺瀧行事。天形星不動明王）。

吾等五六六根六境界具足現在ヘ出生スルナリ。

九月メニハ（尻ノ穴）。天二十八宿刀八毘沙門天王。（イナム嶽之行事。地三十六禽一字金輪王九億四萬三千四百九十二神九萬八千軍天卅番神）。

母ノ胎内ヲ出生スル始ナリ。其後日数ヲツモリテ。兩手ヲ開キテ氣ノ二字ヲ含テ出生スルナリ。

この説では、胎児の成長が、両目・両鼻・口・両耳・大小便という九穴の生成によって九つの段階に分けられる。そして、この九ヶ月間の各月には、胎児を守護する神仏と行うべき修行、また、胎児の身体の様子と成仏への階

梯が記される。ここで示される子守、勝手、金カケ（鐘掛）、西除、泥川（洞川）、節、阿古瀧、神通寺瀧、イナム嶽（稲村嶽）とは、大峰山の山上ヶ岳付近の修行場で、日天子、十一面等は、そこに祀られる本尊である。修行において即身成仏への階梯に擬せられる〈胎内五位〉は、大峰山での実際の修行を「胎内修行」とするとき、九つの階梯に分けられたものは、より説得性を持つ。

先述したように、正保二年（一六四五）の序文を持つ『山伏一字義』には、〈胎内五位〉に変えて、『大報父母恩重經』の十月月に渉る胎児生成説が引用される。江戸切紙注釈の世界に、現実の懷妊期間に合わせた月毎の胎児成長過程が記されるようになるのは、時代の趨勢を反映してのことでもあろう。しかし、『峰中秘伝』の説は、經典にはなく、胎児を九ヶ月間月毎に守護する神仏を記す点が、特異である。『峰中秘伝』に初見するこの説がいつ頃より相承されてきたのかは明らかでないが、修験道教義において、ある時期に、最も重要視された〈胎内五位〉からの脱却が起こっていたことは確かであろう。

結語

京都大学附属図書館に、慶長五年（一六〇〇）書写の奥書を持つ『生下未分之話』という写本が伝わる。^{（注20）}この書では、懷胎から出産までの胎内における胎児十ヶ月間の変化を、その月々において胎児を生成・守護する「不動・釈迦・文殊・普賢・地藏・弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀」という十三仏信仰において死者の霊を導くとされる十三仏のうちの十仏の功力と、「白露・両の目鼻耳出来る・口舌出来る」といったその月々の胎児の形象、あるいは「錫杖・独鈷・三鈷・鈴」といった仏具の比喻によって説明する。この説は、また、〈胎内十月の由来〉として〈熊野の本地〉系説経・古浄瑠璃正本に見える。そこでは、例えば、胎児一月目の守護神を不動、その形象を独鈷として三悪道に入る始めとし、出生する十月目の守護仏を阿弥陀、形象を逆様になった人形として六道に迷い出る始めとする。これらのことから、この説には、密教系僧侶、特に入山を母胎回帰の象徴として擬死再生の儀礼を行った

修験山伏や、出生から死そして地獄巡りをしての再生という円環を説いた熊野比丘尼が大きく関わっていたともいわれる。

修験道教義書の胎児生成論は、『俱舍論』または『俱舍論記』に基づく〈胎内五位〉説が、主流を占める。そして、そこに、独鈷・三鈷・五鈷といった印契を当て嵌めることや、〈胎内五位図〉を取り入れるといった修験道独自の改変が成される。しかし、出生までの九ヶ月間の各月に、胎児を守護する神仏を記し、その生成過程を説明するものは、江戸時代に纏められた『峰中秘伝』所載の説にのみ見出すことができる。^{（注21）}果たして〈胎内十月の由来〉は、修験道より起こったものであるのか。江戸幕府の修験道法度、明治政府による修験道廃止令という二度にわたる大きな試練を受けた修験道資料の博搜が求められる。

注

- （1）『修験道章疏』第一卷（『日本大藏經』第四六卷、大正五年刊）所収。なお、「修験道章疏」第二卷（『日本大藏經』第四七卷）、および「修験道章疏」第三卷（『日本大藏經』第四八卷）は、大正八年刊。「修験道章疏」一〇五（『増補改訂日本大藏經』第九二〜九六卷）として、昭和五十一年（鈴木学術財団編、講談社）に再刊。その後、昭和六十年に名著出版より三巻本が復刻。さらに平成十二年に国書刊行会より三巻本が出版されている。

（2）『修験道章疏』第一巻所収。

（3）『修験道章疏』第一巻所収。

（4）その原文は、次の通り。

謂母腹中分位有五。

一羯羅藍位。

二鰾部曇位。

三閉戸位。

四鍵南位。

五鉢羅奢佉位。

此胎中箭漸次轉増。乃至色根形相満位。由業所起異熟風力轉胎中箭令趣産門。

(卷第九「分別世品」第三之二)

(5) 「修驗道章疏」第一卷所収。

(6) 「驗乘書菟集の苦心」(『神變』一二四号、大正八年八月)。

(7) 「修驗道章疏解題」(平成十二年国書刊行会) 参照。

(8) 「修驗道章疏」第二卷所収。

(9) 「修驗道要秘決集」では、独鈷・三鈷を、次のように定義している。

三鈷頭者三身。独鈷形者即一也。三身即一深義可思之。独鈷形三寸標三界唯一心之義。

(10) 役小角伝持と称せられ、当山派に相承された『自供養法大事』(「修驗道章疏」第一卷所収) には、「床堅坐位」の前に、修驗者が自身を本尊と観じる法として、次のようにある。重々の口伝で師より面授されるものとするが、「胎内五位」が対応されると考えられる。

第一 天地潤水至_レ爰 重重有_二口伝_一。可_レ問_二師面授_一。

第二 獨股形 同

第三 三胎形 同

第四 五胎形 同

第五 數息觀 胎内義

(11) 「修驗道章疏」第二卷所収。

(12) 「修驗道章疏」第三卷所収。

(13) 「修驗道章疏解題」参照。

(14) その原文は、次の通り。

阿難問經說。識託母胎。凡經三十八箇七日。每七日各有二風吹令變易。(名爲二轉)。計三十八箇七日。總二百六十六日成九箇月。(五大四小故少二四日)。

(15) 「修驗道章疏」第二卷所収。

(16) 「修驗道章疏」第二卷所収。

(17) 「修驗道章疏解題」参照。

(18) 「修驗道章疏」第二卷所収。

(19) その本文は、次の通り。

此明胎内五時次第成長。

羯刺藍。此云和合。或云雜穢。或云凝滑。

頰部曇。此云施。

閉尸。此云血肉。

健南。此云堅肉。

盆羅奢佉。此云支節。後髮毛爪等乃至色根形相滿位總名第五位。

なお、『小笹秘要録』(寛正六年・一四六五・乗円書写相伝、元禄十六年・一七〇三・勝全書写補筆。「修驗道章疏」第二卷所収) には、次のようにある。

明山臥形體者。胎内五位時。第五位之戴衣那形體也。故付瑜祇經中五

指量愛染習傳故。於不知顯宗者全也。其位者。俱舍十二卷云。

羯刺藍此云和合也。

二安部曇此云施。

三毘尸此云燠肉。

四健南此云凝骨。

五鉢羅捨迦此云支節。文

(20) 「修驗道章疏」第一卷所収。

(21) 「修驗道章疏解題」参照。

(22) 近代において修驗道思想を体系的に纏めた村上俊雄は、『修驗道の発達』(昭和十八年畝傍書房) のなかで、「修驗道の教義行事の下に山伏行者の威儀衣體及び

法具を論ずることは一見奇異の感なきではない。然し、實習實證を重んじて教義的方面が重要視されず、その發展を遂げることの少かつた修驗道の教理の大部分はかゝる法具をめぐつての神秘的象徴的解釋であつたと見て差支ない」とする。

(23) 「修驗道章疏」第一卷所収。

(24) 〈胎内五位図〉に関しては、以下の論考参照。

①水原堯榮『邪教立川流の研究』(大正十二年進文堂書店、昭和四十三年富山房書店再版。また、『水原堯榮全集』第二卷昭和五十六年同朋舎出版に所収)。

②守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』(昭和四十年鹿野苑、平成二年国書刊行会再版)。

③村岡空「性と仏教―真言立川流の新資料をめぐって―」(『歴史公論』五二号、昭和五十五年三月)。

④牧野和夫『扶桑蒙求私注』を通して見た一、二の問題―「日本名僧伝」その他のこと」補四(『東横国文学』昭和六十年三月)。

⑤牧野和夫「事相書・口伝書にみる「日本記」・平基親のことなど―覚書」(『実践国文学』昭和六十三年三月)。

⑥伊藤聡「伊勢二字をめぐる―古今注・伊勢注と密教説・神道説の交渉」(『神仏習合思想の展開』平成八年汲古書院)。

⑦拙稿「彦根博物館琴堂文庫蔵『十三佛秘中極秘之口決事』―胎内十月の由来」と立川流の接点を求めて―(『東京成徳短期大学紀要』平成八年三月)。

⑧真鍋俊照『邪教・立川流』(平成十一年筑摩書房)。

⑨拙稿「中世古今注所載〈五輪五仏和歌同体〉説―人丸歌「ほのぼのと」と〈胎内五位図〉―」(『東京成徳短期大学紀要』平成十二年三月)。

(25)『修驗法具秘決精註』下巻には、また、次のような一文が載る。

古記曰。胎内五位圓滿而人相皆備時。以兩手着額下蹲踞而坐。其時身長母一攢手半齊。二云云

〈胎内五位図〉は、立川流の根本教義とされる「赤白二滯冥会最深秘説」をあらわしたものとみられる。修驗道教義書に〈胎内五位図〉が、一部分のみ引用されるのは、あるいは、これを邪教視したためか。『修驗道教要秘決』には、次のようにある(『修驗三十三通記』も同義)。

先邪法者陰陽和合赤白二滯號^ヲ兩部。言^テ佛法甚深之由。此二滯冥合而出^シ生我色身所有事業。皆是談^ニ法性^ノ說^ク菩提^ヲ。頗^モ是法滅之基也。一切衆生從^レ本^ニ大^ニ法^ニ界^ニ體^ニ性^ニ上^ニ無^レ離^ニ。法性^ノ一^ニ法^ニ。雖^モ然^ル於^テ偏計^ノ愚情^ノ前^ニ何^レ令^ニ必^ニ赤白二滯談^ニ甚深^ニ一起^ニ邪見^ノ耶。以^テ如^ク此邪義^ヲ猥^ニ作^ニ道解^ヲ。好行^ニ非道^ノ。是則大邪見也。

(26)『修要鈔』と『修驗記』、また、この二書と『修驗修要秘決集』『修驗法具秘決精註』の関係については、以下を参照。

①浅田正博「修驗道教義書に引用された口伝書の考察―『修驗三十三通記』並びに『修驗修要秘決集』を通して」(『大倉山論集』二七号、平成二年)。

②浅田正博「『修驗修要秘決集』の注釈書としての『修要鈔』三巻と『修驗記』十巻について」(『龍谷大学論集』四三六、平成二年)。

③宮家準『修驗道思想の研究(増補決定版)』(平成十一年春秋社)。

(27)修驗者に相伝されてきた秘法・禁咒・祈祷法などの切紙を集めた『修驗深秘行法符咒集』巻六―百九十四「陳拂法兵法番大事」の裏書では、護身咒を示す

「臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前」の九字を、たとえば、「臨者混沌未分之處。父母之姪精和合シテ。大圓鏡智界ヨリ人間界エ臨ム初ニ依テ臨ト云ヘリ。此心ヲ可知也。皆ニ渡ル也」などとして、それぞれ胎児成長の過程にあてて。

また、『十三佛秘中極秘之口決事』(注23⑦)では、胎児の成長する過程を「九図」として説明する。

(28)注(26)③参照。

(29)この書については、以下の拙稿において触れた。

①胎内十月の由来―仏書『生下未分之話』『生下未分語』をめぐる―(『東京成徳短期大学紀要』平成五年三月)。

②「大阪府立中之島図書館石崎文庫蔵写本『三賢一致之書』について附翻刻」(『東京成徳短期大学紀要』平成六年三月)。

(30)『修驗宗法具秘決精註』巻上「金剛杖口決」には、

三摩耶形者。

胎内初位一圓相一水猶如獨古。

二七日如三古。

三七日如五古。

四七日如鈴形。

此等位云三摩耶形。佛菩薩明王天童持三杵或鈴劍等。故五七日處者尊形。大日阿闍相好也。冷煖自知。

とあって、四位に「鈴」をあてて。また、胎児の成長を十ヶ月にわけ、これに密教法具の独鈴・三鈴・五鈴・鈴をあててのものとして、両部神道の書『天下皇太神本縁』(『両部神道集』真福寺善本叢刊6、平成十一年臨川書店所収)や、

『神道大事』(小川豊生「京都大学図書館蔵『神道大事』―〈解題と翻刻〉」『日本古典文学における偽書の系譜の研究』平成十五年三月)が紹介されている。